

京都特別集会 聖霊降臨節

復活のキリストの約束

——ルカ伝第12章49～51節——

1996年6月1日

小池辰雄

無者 神交 我は火を投ぜんために来た 主さま！ アーメン、ハレルヤ！ 例外者 ひとえに親鸞一人がためなり キリストの中に帰っていく 祈り

【ルカ12】

49 我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。50されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや。51われ地に平和を与えんために来ると思ふか。われ汝らに告ぐ、然らず、反つて分争なり。

【マタイ5】

1 イエス群衆を見て、山にのぼり、坐し給えば、弟子たち御許にきたる。
2 イエスをひらき、教えて言いたもう、³ 『幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。』

● 無者

キリストが復活されて五十日目がペンテコステです。十字架に架かって、キリストはそのままではない。復活された。「復活」という言葉は、また生き返ったというような気持ですが、本当はそうではない。新しい霊的な生命に展開されたわけです。もちろん、地上におられた時のキリストは聖霊のかたです。正に霊人です。神の霊が宿っている霊止です。キリストは、「自分は何も言えない、何もできない。ただ父の命ずるままに言っているだけだ、やっているだけだ」と仰った。それで私はキリストのことを、

「無者」

と申します。自分を何ものともしない。神一切ということ。父なる神一切。だから、キリストは神さまのことを「父よ」と言われる。世界中に、キリストのことを無者なんていう言い方をする人はあまりないかと思えますけれども、私はそう言わざるを得ない。自分は何も言えない。ところが、神という無限大が入ってくる。まあ、大変なことです。我々はゼロで、キリストが無限大に入ってきたら、これは本当のクリスチャンです。ク



リスチャンというのは、キリストを信じているのではない。「信ずる」という言葉はだめです。私は、信じ仰ぐ「信仰」という言葉は嫌いだ。キリストは神さまと一つになっている。

「我を見し者は父を見しなり」

と、これはキリストの素晴らしい御言です。私を見た者は父なる神を見たのだと。そういうことをはっきり言っている。

「我を見し者はキリストを見しなり」

と、我々が言えるのが本当なんです。

「あなたは何を見ているか。相対的な罪びとの人間小池なんて見ていたらだめだ。

私の中にあるものが見えるか」

と、私はそう言わなければならぬわけです。

● 神交

在らしめられている。我々はキリストに在らしめられている存在です。在るのではない。こんなしようがないやつをキリストは捨てない。

「人は棄つれど汝は棄てず」

という讃美歌があるでしょ。誰に棄てられても構わないが、キリストは棄てたまわない。キリストはあなた方一人ひとりを棄てない。信仰があるから棄てないのではない。信仰があろうがなからうが、そんなことではない。

「私はお前をちゃんと捕まえているぞ。逃げられないぞ」

と。キリストの愛の力に圧倒されて生きているだけのはなしで、自分の信仰でキリストを信じていません。私は自分の信仰なんてものは考えない。私は信仰なんかありません。もし「しんこう」というなら、

「神交」

と書く。キリストは正に、神交わりのひとである。パウロがキリストとそういう関係だった。という。さすがはパウロさんだ。始めはキリストを信ずる者を迫害していたあの男がひっくり返された。ダマスコ途上でパウロは復活のキリストにやつつけられてひっくり返された。三日三晩ものが言えず目が見えず、何も食べられない。復活のキリストに徹底的にやつつけられた。パウロの回身^{かえみ}というのは凄い。前にも後にもあんな回身はない。「かいしん」

というの「回心」ではなく、

「回身」

です。身体^{からだ}がひっくり返される。心だけではなく、全存在^{ぜんぞんざい}がひっくり返される。

私は、「キリスト教」という言葉は嫌いです。教えではない。

「キリストの教えはどんなものか」



なんて、教えなんていうものではない。冗談じゃない。

「キリスト道」

です。「我は道なり」とキリストは言われた。

「我は道なり、生命なり、真理なり」

とはキリスト自身の御言です。日本人は本当は道の民です。剣道、柔道、茶道、華道、みんな道なんです。自分の全身でもって歩かなければならない道です。大体、「キリスト教」なんていつて、もったいぶっているのはおかしい。

「私は信仰なんかありません。自分の信仰なんか持っていません。キリストに圧倒されて生きていますだけです」

と私ははつきり言う。本当ですよ。そうすると、もの凄い力がくる。

「自分の信仰はどうだろうか」

なんて考えているのではない。そんなものは省みたつてしようがない。ゼロなんだ。

ゼロだと無限大にされる。そのゼロもキリストがくださったゼロなんです。キリストの「贖い」というのは、

「生まれつきの我々をゼロにした」

ということですよ。そして、無限大のものをくださる。無限大の内容は聖霊です。キリストの霊です、神の霊です。

●我は火を投ぜんために来た

圧倒されて火が燃えているような世界なんだ。

「我は火を投ぜんために来たれり」

とキリストは言われたでしょ。ルカ伝12章です。

「⁴⁹我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。

素晴らしい言葉だね。

⁵⁰されど我には受くべきバプテスマあり。

贖罪の十字架のことです。

その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや。⁵¹われ地に平和を与えんために来ると思ふか。われ汝らに告ぐ、然らず、反つて分争なり。」(ルカ 12・49～51)

「私を受けとる者と受けとらない者とは争いになる」

と。これはもの凄い言葉だ。平和ではない。本当は平安なんです。平和は人と人との間のことだ。平安というのは神・キリストと我々一人ひとりの関係です。これがちゃんと立つことが平安なんです。縦の関係が立たなければ、横がだめなんです。



「汝ら互いに相愛せよ」

と言ったって、本当は愛せないんです。私はキリストの前には平伏ひれふすよりか他に私の在り方はない。平伏しです。ドイツのデューラーの絵に、キリストがゲッセマネの園で平伏して、そばに天使があらわれている絵がある。キリストは父なる神一切で、

「自分は何もできない、何も言えない」

と仰った。キリストはそういうひとなんです、ゼロなんです。そうすると、無限大なものがやってくる。本当の自由というものは、人間は持つていない。

西郷南洲が、

「敬天愛人」

と言いました。まず「敬天」がなければ、人を愛すること「愛人」はできない。ところが、今の日本の民主主義には敬天がない。西郷さんにやつつけられるよ。上野の西郷さんが嘆いている。そういった魂たましひの政治家がいるかね。

「魂」は本当は「魂之靈」と書く。これは「たましひ」と読む。「霊」は「ひ」と読む。

「我は火を投ぜんために来たれり」

のあの「火」は霊です。キリストは霊なる火を投ぜんために来たという。

●主さま！ アーメン、ハレルヤ！

西田幾太郎先生は、

「我は我なり、我が道を行く」

と言った。私は西田先生のあの魂は好きだね。あなた方一人ひとはキリスト直結です。何ものにも属さない。キリスト直結の存在です。一人ひとりがキリスト直結だから、それが集まると素晴らしいことになるわけです。

私の祈りは非常に簡単です。私の祈りは、

「主さまー」

の一言です。腹の中で——なにも声は出さなくたっていい——「主さまー」と全身でもって音のない叫びをする。そうすると、その叫びと共にキリストの中に入ってしまふ。そして、その次はただ「アーメン、ハレルヤ」だけ。

「主さまー！ アーメン、ハレルヤー！」

これが私の祈りです。あとは、いいようにしてください。どうなっても構いません。人間は相対的な存在だから、いろいろなことを考えるよな。それが悪いとは言わないけれども、それが心の主な働きだったら、それはだめです。

「主さまー」

という叫びだけが祈りなんです。あとは

「アーメン、ハレルヤー！」



そして、主さまの導きが示されてくる。それは何をやっても、今度は力がくる。キリストから力が来なかつたら、キリストを生きていない。キリストを信ずるのではない。キリストを生きる。病気で寝ていようが、いわゆる健康であろうが、何でも構わない。とにかく、キリストを生きることが大事です。

あなた方一人ひとりはそのつぴきならない使命がありますよ。我々の存在は使命的存在なんです。人を助け、人を救う義務と栄光がある。

「彼のそばに行くと、なにか光がさしているようだ、力があるようだ、なにか普通の人とは違うな」

と、相手にあなた方の存在そのものが感ぜさせる。キリストの生命が溢れていると、そういうことになる。

● 例外者

復活のキリストは四十日間あらわれて、いろいろなことを弟子たちに語った。そして天界へ行ってしまった。これは大変なことだ。ちょっと想像もつかないね。弟子たちが集まっている所に、戸が閉まっているのに入ってきた。

「食べるものがあれば食べるぞ」

と、お魚を食べた。まあ、大変なひとです。私は、キリストはどういう人かという、ただ、「大変なひとです」

と言うよりか言いようがない。ソクラテスもお釈迦さんもキリストとは桁が違う。イエスというひとは本当に大変なひとです。説明なんかできない。感嘆するだけ。私は皆さんに説明なんかしているのではない。告白しているだけです。

私は例外者です、いかなる部類にも入りません。皆さんも一人ひとりが、本当の存在はみんな例外者です。比較なんかできない。キリスト直結の人はみな例外者です。例外者が集まると凄いことになる。

「あの人がいるから、どうだこうだ」

なんてことではない。

「例外というのは楽しいね」

とお互いに言ったらいい、男の人でも女の人でも。

マタイ伝5章に、

「イエス群衆を見て、山にのぼり、坐し給えば、弟子たち御許にきたる。
「山」とはガリラヤ湖の北の方の丘のことです。

2 イエスをひらき、教えて言いたもう、³ 『幸福なるかな、心の貧しき者。
天国はその人のものなり。』 (マタイ5:1-3)

「マカリオイ
幸福」とは、



「恵福」
「さいわい」

と書く。恵まれたるさいわいです。いわゆる幸いではない。

「恵まれたるかな」

と言つてもいい。

「心の貧しき」

とは、

「自分を何ものともしない」

ということ。無我者です。我が無い。

●ひとえに親鸞一人がためなり

「弥陀の五劫思惟の願いをよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり」

この言葉は素晴らしいね。親鸞の言葉でこれは一番私は好きな言葉です。

「阿弥陀さんの持つている素晴らしい願いは私一人のためだった、それで私は救われた」

と親鸞が言っている。これは『歎異抄』にある言葉です。

「マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書はよくよく案ずれば私一人のためである」

というのと同じことです。あなた方は聖書がそのように、

「これは私のために書かれたものである」

ということにならなくては。

「ありがたくてしょうがない、力が来てしょうがない、生命が来てしょうがない」

という、そういうしょうがない人間にならないとね。

西郷南洲はそういうしょうがない人間なんだ。非常に人間味の深い人ですね。しかし、

それはもの凄い力が来ている。

「敬天愛人」

と言った。

「天を相手にして生きろ。人を相手にしてはだめだ」

と言った。

イザヤ書に、

「天よ、聞け」

という言葉がある。

「私の言葉は、お前、天が聞いたらよからう」

と。あのイザヤというのは凄いね。天を相手にすると、今度は天に相手にされている。天が自分を相手にしている。受け身です。本当の我々の在り方は受け身の世界です。上から来ている力がさせる。こつちからではない。信仰ではない。止むに止まれざるようにして



生かされている、在らしめられている。その中に入れられている。だから、私は「信仰なんていう言葉は嫌いなんだ、

「私は信仰がまだあまり行っていないですね」
なんて。

「そうですか、そんなことをしていると、くたびれますよ。信仰なんかよしなさい。圧倒されていきなさい」

と私は言う。キリストの言葉は意味ではない。力がある。光がある。生命がある。キリストの言葉は、「分かる、分からない」ではない。キリストの言葉に圧倒されていく。

「いやあ、聖書を読んだら圧倒されて大変だ」
というのが本当の読み方です。

とにかく、私たちは神・キリストに圧倒されて、やりきれなくて、生かされているという告白の一人ひとりである。そういう群はそれが本当の力となる。

●キリストの中に帰っていく

空海の言葉に、

「我という小さき心を棄ててみよ三千世界さわるものなし」

「本当の無我の境地に入らなくてはだめだ、我があつたらだめだ」

ということですが。

「月影のいたらぬ里はけれども眺むる人の心にぞすむ」

蓮月尼の句に、

「宿かさぬ人のつらさをなさけにておぼろ月夜の花の下ぶし」

おぼろ月夜に桜の花の下で寝たら、それがかえって良かった、なんてね。

「悔い改め」

という訳はよくない。これは

「帰り行く」

ことなんです。帰り行くという言葉は旧約のイザヤ書にもある。それを「悔い改め」と訳すのはうまくない。

「キリストのもとに、神のもとに帰って行きなさい」

ということですが。悔いて改めたってしょうがない。帰って行けばいい。神さまの中に、キリストの中に帰って行く。

我々はあるがままで——なにも体裁をつける必要はない——そのままキリストの中に投げ入れるんです。投身です。そうすると、キリストに一つにされる。そうすると、力がくる。これが本当の「神交」です。信じ仰いでいたってしょうがない。

「キリスト教の信仰があるとかないとか」



と、一般の人はみなそう言うね。私ははっきり、

「そんなものはありません。私はキリストに圧倒されているだけです」

と言う。それが本当の答です。バーツと力がくる。力が来なかったらしようがないものね、生命が来なかったら。理屈ではないから。現実なんだ。だから、ありがたくてしようがない。楽でしようがない、力が来てしようがない。そういうしようがないことになる。

いろいろ語らせていただきましたが、私の気合は、気持は同感してくださったと信じております。ありがとうございます。

● 祈り

祈ります。主イエス・キリストの父なるおん神さま。僕また東京の者たちも、その他の召団の方々も、この京都の奥田兄弟の集会に招かれまして、今日只今まで、聖言、聖霊によりて——語るも聞くも同じこと——あなたの証しをすることが許され、証しできまして感謝いたします。

私たちはただ、キリストさま、あなたを中心としてどこまでも進んで行きたく存じております。我々の生涯の成否は、あなたを中心として生きているか生きていないか、これによって決まりますが、今もなお天界に生きて世の末にいたるまで世のために執り成しをしてください、祈ってください、また力をくださるあなたに、いよいよ、より頼んで、そのことの証し人として私たちは進んで行きたく存じております。

どうぞ、我々を通して、あなたのご栄光が顕れますように、み力が顕れますように。また、福音を知らない人たちに、このような世界があると行って知らせ、そして、本当に喜びに溢れることができますように、私たちをお使いくださらんことを願ひ奉ります。

このようにして、京都の兄弟姉妹たちと一緒に、集会を共にすることを聖名の故に感謝いたします。栄光、聖名にあらんことを。

主キリストの聖名にあつて、兄弟姉妹たちの感謝と祈りと共に、主イエス・キリストのみ前に捧げ奉ります。アーメン。

